

D.H.ロレンスと労働運動—『白くじゃく』をめぐる

倉持 三郎

(平成6年9月30日受理)

D.H. Lawrence and the Labour Movement: With Special Reference to *The White Peacock*

Saburo KURAMOCHI

(Received September 30, 1994)

序

D.H.ロレンス (Lawrence) の作品は、イギリスのみならず、各国で読まれ、理解されており、普遍的な価値をもつことは明らかであるが、他方、当時のイギリス社会の現実に根ざしている面も多い。ロレンスの作品の多くは当時の社会問題に言及しており、現実とのかかわりなしにはよく理解できない面も多い。その点で、最近発表された Macdonald Daley の論文, “Lawrence and the 1912 Miners’ Strike”⁽¹⁾ は興味がある。1912年のストライキの影響を作品のなかに見ようとするものである。このなかで Daley は、短編, “The Miners at Home”, “Her Turn”, “Strike Pay”, 劇, “Daughter-in Law”, “Touch and Go”などの作品を1912年の炭鉱夫のストライキを手掛かりに分析している。これを読むとロレンスが、労働運動に関心があったかがわかる。また、それをめぐって、労使間のもとより、夫婦、親子、兄弟のあいだに意見の対立があったことがわかる。スト開始から約1か月後に、炭鉱労働者組合が行ったスト中止の提案についての賛否の投票のとき、ロレンスの父は、中止に賛成の投票をしたが、大勢は中止に反対であった。ロレンス家でも賛否が分かれた。ロレンス自身は中止に反対であった。

本論では、Daley の問題を、さらにさかのぼって、処女長編小説『白くじゃく』(*The White Peacock*, 1911) のなかに見てみたい。この作品が、当時の労働運動や、労働者の現実生活とどうかかわっていたかを見たい。そのために、この作品が執筆されていた1906年から1909年の間の、有力な新聞、『タイムズ』(*Times*) や、文学部英語英文学第2英文学研究室

『マンチェスター・ガーディアン』(*Manchester Guardian*) の記事に言及してみたい。こうすることによって、この作品がよりよく理解されるだろう。

1

『白くじゃく』は全体としては牧歌的な作品である。作者が幼いときから親しんできた、イングランド中部地方の田園の美しい自然を背景にして書かれており、友情や恋愛が扱われているので、全体として美しい雰囲気を出している。描写力のたしかなさも示している。他方、最初の長編小説らしい未完成の部分もある。

ロレンスの文学的才能の発掘者であるフォード・マドックス・フォード (Ford Madox Ford) は「この作品には、イギリス小説のもつあらゆる欠点がある。しかし君には才能がある」⁽²⁾ と述べている。ロレンス自身も回顧して、「水っぽい、派手な代物」⁽³⁾ だと、否定的に自作を語っている。こういう事情もあって、この作品は、小説として、後の主要な作品に比べるとそれほど、高い評価は与えられてきていない。Sagar は、「小説それ自体としてはほとんど注目に値しない」⁽⁴⁾ と述べている。しかし、それが十分に表現されなかったとしても、作家としてのロレンスの主題が扱われていることは明らかである。その主題の種々の面について、これまで論じられてきた。

そのなかには作品のなかの男女関係に重点をおく見方がある。たとえば、Stoll は、「所有欲の強い女性の性質」⁽⁵⁾ が描かれているという。タイトルにもなっている「白くじゃく」のような高慢で強圧的な、レイディ・クリスタベルや、シリルの母、ピアズオル夫人に男性を「所有」しようとする女性を見、そして、娘のレティに

も同じ傾向を見る。他方、父親、ピアズオルは、受け身の生き方しかできず妻に支配されることになる。このように支配し所有する女性と受け身な男性の対比は、ロレンス自身の父母をモデルとしていると考えられ、作品に反映するのは当然である。これは社会の問題より心理的な問題である。

Holderness はかなり、当時の社会的現象に目をむけている。「審美主義とリアリズムの間の闘争は小説に充滿している。最後の数章では、決定的な対立があり、そこから、審美主義が、悲劇を避ける唯一の手段として現れる」⁽⁶⁾しかし、Scheckner のように、階級や政治の問題を扱いつつながら、『白くじゃく』には言及せずに、*Sons and Lovers* から論を始めている批評家もいる⁽⁷⁾。

現実の次元ではなくて、神話の次元で解釈しようとする見方もある。Gajdusek は、この見方から作品のなかの1章、A Poem of Friendship を解釈する。「このようにこの章では、ジョージは、人間としての役割からさらにこの必要な総合をつかさどる自然の神としての働きをする。彼は、キリストと、自然の神の働きを兼ね、彼の生死は説明し、確立する循環行動をはじめ」⁽⁸⁾ Hinz は、これをさらに発展させて、「この作品は形式がないどころではなくて、この作品には叙事詩という折紙をつけられるほど形式がある」⁽⁹⁾しかし、これは、古典の教養のあるシリアルを中心とする見方であって、労働者の現実とはかけはなれている。

ここでは上記の Holderness の言う「リアリズム」の見方の上に立ち、それを強調することになる。結論を先に言えば、中産階級のシリアルを語り手にしたことによって、労働者のリアルな姿が読者には十分に伝わってこないということを指摘したい。

2

深刻な現実問題のひとつは、炭鉱のストライキである。第2部の1章の冒頭でそれに対する言及がある。ある年の冬、テンベスト・ウォラル会社（現実には、Barber and Walker）の炭鉱夫たちがストライキに入ったのである。

冬が大地に横たわってからもう長かった。テンベスト・ウォラル会社の炭鉱夫が坑内の作業制度の変更の問題でストライキに入った。苦悩はひどくはなかった。と

いうのは、炭鉱夫たちは、全体としては、賢明で暮らし向きがよかったからである。しかし、その地方には暗い表情が現れ、ひどく苦しむ者もいた。いたる所に、小道や街路に何もすることがなく、元気のない炭鉱夫の群れがうろついていた。来る週も来る週も続いた。炭鉱労働組合の代表者は重要会議を開いた。そして牧師はお祈りの集会を開いた。しかし、ストライキは続いた。（中略）学校は朝食を出し、教会はスープの炊き出しをし、金持ちはおやつをふるまった。子供たちは大喜びだった。しかしわれわれは、老人の表情や主婦たちの困窮がわかるので、悲しみとトラブルの冷たい、絶望的な雰囲気につつまれた。（125）⁽¹⁰⁾

このストライキは、Barber Walker & Co. の1908年のストライキがモデルになっている。⁽¹¹⁾結果、何が起こるかという、当然資本家には打撃ではあるが、それにもまして、賃金をもらえず、組合からのストライキ手当だけで糊口をしのがねばならない労働者にとって影響は大きい。彼らの生活は苦しくなる、ロレンスが短編、「ストライキ手当」で描いたように親子間に口論が起こる。苦しい労働者は生活のたしにするため密猟を行うことになる。

計画的な密猟（poaching）が地主の森と養兎場で行われた。アナブルは、自分の管理下の鳥獣を英雄的に保護した。つるつるした道路で滑って脚を怪我したと帰宅したものがいた。しかし実際は、森の中の密猟者向けに仕掛けられた罠によるものだった。それからアナブルはふたりの男を捕まえた。ふたりは10か月の禁固刑を言い渡された。（125）

地主たちは密猟にきびしい措置を取った。「従来から炭鉱夫の賃金のたしにしてきた密猟にたいして地主が強硬措置をとったことで、対立感情に油を注いだ」（376）ストライキをする労働者からいえば、密猟は食料のたしにするためである。こういうふうを考えれば、森番というのは、地主の手先である。

このストライキとは直接には関係ないが『ガーディアン』は1908年1月から12月までに次の2件の密猟を報じている。8月13日には、「クルーで密猟の夫婦罰金刑」という見出しで報じている。夫婦が「密猟禁止法」に触れたというかどで起訴された。帰宅の道路上、妻が長さ

70ヤードと幅60ヤードの網とほかの密猟の道具を所持していたのを警官が発見して逮捕した。獲物はないのであるが、網が濡れているところから、密猟したと疑われたのである。夫はこれまで数回の密猟の前科があった。

10月26日には、密猟事件の裁判の様相を報じている。「Congleton密猟乱闘」(Congletonはチェシャ州の町)という見出しで次のように述べている。

As a sequel to a fight between gamekeepers and poachers at Congleton last August Mr. Justice A. T. Lawrence was occupied the whole of Saturday at Chester Assizes. Ten men, all living in Congleton and district, were charged with night poaching on the land of Geroge Herbert Shakerly Ackers, of Moreton Hall, Congleton.

さらにその裁判の内容が紹介されているが、それによると、8月27日の夜、二人の森番、少年労働者が、2組で、14人の密猟者をみつけて乱闘になった。密猟者は石と棒を持ち、森番たちは、棒を持って乱闘した。密猟者は、その場を逃げたが、翌日9名が逮捕され、もう一人は1か月後に逮捕された。全員がこの件には関係ないとしたが、密猟したことは認めた。警察は被告たちを密猟者として目星をつけていた。森番頭の陳述によると、所有地にはウサギがたくさんおり、密猟を防ぐのが困難であった。

陪審員の判決は、3名(内、2名は農業労働者で1名は炭鉱夫)は有罪の判決で、禁固6か月の刑が言い渡された。ほかは無罪であった。私有財産を厳重に守るということで、イギリスは密猟者を厳しく取り締まるのであるが、それにしても厳しい判決である。

アナブルの位置はどうなるのか。森に畏がしかけられてある。そこに、サクストン家の猫がかかった。片方の脚は折れてしまい、その後、苦しまないように殺される。しかし、畏は猫をとるだけではない。密猟者を捕らえるためでもある。最後にアナブルが落石で死亡するところに、労働者対アナブルの対立が現れている。死亡の原因は、事故死ということになったのだが、密猟を発見され、告訴された労働者の復讐だといううわさも流れる。

検視で、事故死だと断定された。しかし村では、森番に対する復讐であるという噂が流れていた。(154)

この部分について、ロレンスははじめの原稿では、以下のようにもっとはっきり書いている。

Certain miners left the district and went to Doncaster this time, certain of those who had been convicted for poaching, and who had sworn revenge, among them. It was Geroge who brought me the story that the miners had loosened the stones in the wall, and had even pushed them down from the top when the keeper was climbing in pursuit. I do not know; I don't suppose it is so. (382)

これを読むと、その状況がよくわかる、現行版のように復讐のためといわれても、はっきりしない。元の版を読むとその状況はわかる。犯人は逃走したというのである。ということは、犯行は意図的であった。あらかじめ、壁の上の石を崩れやすいようにゆるめておいたとか、密猟で追われたとき、下からのぼってくるアナブルの上に石を落としたとすれば状況はよくわかる。作者もそちらの方がよいとは思ったであろう。何かの理由で、対立がはっきりわからないように、わざとぼかしてしまったのである。このことが端的に語るように、炭鉱労働者の存在の表現をできるだけ抑えようとしている。

採石場所における事故は、『ガーディアン』に報じられている。1908年、7月1日の調査委員会の報告によれば、採石場における事故死は、1906年は8人で、1907年は15人であった。(ちなみに炭鉱における事故死は1906年が82人、1907年が67人であった)

これを見ると採石場における事故はそれほどめずらしいことではない。逆にいえば、危険な場所であったということであり、作品におけるアナブルの事故死は、それほど不自然なことではなかった。

また、元の版の方で最後に、「私はそうは思わない」と否定しているが、これも、状況をわざとぼかしているのである。

こういう状況から見れば、アナブルは、資本家の手先である。労働者には蛇蝎のように嫌われているわけである。ところがこの作品の読者には、かならずしもそう見えない。なぜならば、アナブルは同情的な視点から見られているからである。シリルの視点は同情的であり、共

感的である。

森番と知り合いになったのはこの頃であった。みなは彼を憎んでいた。村人にとっては、彼は森の悪魔であった。坑夫のある者は、刑務所に入れられたことで彼に復讐を誓っていた。しかし彼はぼくには魅力があった。そのすばらしい体格、元気のよさ、生命力と浅黒い、暗い顔はぼくを引きつけた。(146)

Stoll は、「愛情ある父が感受性の強い息子を扱うようにぼくを扱ってくれた」というシールの述懐を引用しながら、こう述べている。「アナブルは、象徴的な理想であり、シールがあるべき姿の父と再度合体するための手段である」⁽⁴²⁾ ここからは、労働者に憎悪されているアナブルの姿は見当たらない。語り手と同じく読者もこのようにアナブルを見ている。

この引用の直前には、サクストン家とアナブルの対立が描かれている。なぜなら、ウサギはサクストン家にとって農作物を食い荒らす害獣なのだが、アナブルは、地主の命令のもと、人間よりもウサギが大事だとする。これで対立が起こっている。

アナブルの家は子供も多く貧乏である。アナブルの死後、子供のサムが、隣家の飼いうさぎを盗むところは作品で詳しく描かれている。ところがシールは貧乏人としてのアナブルを描こうとしていないのである。精神的父として見ている。文明呪詛の哲学に共感を覚えているのである。しかし、労働者から見れば、結局は、アナブルは地主の手先の仕事をしており、貧乏な村人を苦しめている。

3

第一部 8 章には、炭鉱夫の姿が、エピソードのように語られている。クリスマスイヴにテンペスト家でクリスマスパーティが開かれようとしており、そこにシールとレティは出かける。その途中、偶然、彼らはふたりの少年に会う。これから炭鉱に出かけようとしている少年炭坑労働者である。

森のなかの小道をぶらぶら来ると、ふたりの男の子に会った。15歳か16歳であった。衣服には、丈夫な木綿の布が大きくあててあった。首にはスカーフを巻いて結び、ポケットには紅茶の一杯はいった水筒と結んだ

弁当箱が押し込んであった。

「あら」レティは言った。「クリスマスイヴに仕事に行くの?」

「そうらしいよ」と年上が言った。

「それで何時にもどるの?」

「2時半だよ」

「クリスマスの朝ね!」

「主の御使いと星をさがせるね」とぼく(シール)が言った。

「御使いは、おれたちを汚ねいちびの悪魔と思うだろうよ」と年下が笑いながら言った。

「おれたちが坑外に出るまでに来てしまいうだろうよ」と年上がつけ加えた。「坑内まで降りてきてはくれないしさ」

「もし降りてきてくれたら」と年下が言葉をはさんだ。

「あとで洗ってあげないと、弁当をちょっと分けてやるよ」(99)

冗談とユーモアでまぎらわしているが、仕事がいかに大変かは読者に伝わってくる。レティはあとで「私のためにあの男の子が働いているのだわ」という。

この男の子に、シールとレティはもう一度会う。それはクリスマスイヴのパーティが終わり、ふたりがテンペスト家から馬車で戻ってきたときである。「あのふたりの男の子が炭鉱からもどって来るのが見えた。暗闇のなかのふたりに灯火が射したとき、ふたりはグロテスクに見えた、汚れがつき、雪がまだらにつもっていた。」(102)

シールの視点から作品を読む読者にとって、このような炭鉱夫は、自分たちと同じ人間ではなくて、人間ではない「珍奇なもの」に映るのである。この点についての Worthen の次の指摘は説得力がある。「シールとレティが道で会う、ふたりの若い炭鉱夫は、人間というよりも珍奇なものとして描かれている。しかしこのような小説の読者にとって炭鉱夫たちは実際に珍奇なのである」⁽⁴³⁾。

「珍奇」と見ることは、一種の見世物として見ることであって、面白いとは思っても、人間的な同情はもたないのである。少年たちが実際に送っている現実生活が実際はないかのような錯覚をいだく。

この作品では、ふたつの世界を対照的に示そうとしているのは明らかである。富める片方の人たちはクリスマ

スパークティに行き、貧乏な階級は、そのあいだ深い坑内で働いているのである。

単にクリスマスイヴに労働者が働いていることだけではない。少年労働という問題も含まれているのだ。さらに事故で死ぬ少年もいる。『マンチェスター・ガーディアン』は、1908年9月1日には、“Boy Collier’s Death”という見出しで、次のような少年炭鉱夫の事故死を報道している。

At an inquest held yesterday concerning the death of Alfred Mills, 15, rope runner, who met with a fatal accident at the Tinsley Park Colliery, it was stated that he had not been warned according to regulation against riding on the underground tubs conveying the coal. The result was that on Friday whilst riding on a fully loaded tub he got jammed between the tubs and roof.

坑内で石炭運搬車の上ののり、それと天井にはさまれて押し潰されたための事故死であるが、まだ経験の浅い少年に起こりそうな事故である。シ ril とレティが会った「15か16」歳の炭鉱夫も同じような事故にあうことは十分想像できるのであるが、シ ril の視点にはそれは入っていない。

4

3部5章でジョージがロンドンに来てシ ril と会い、ロンドン体験をするところは面白い。それまで描いてきた故郷の「ネザミア」と違う様相が現れているからである。これはロレンス自身のロンドン体験の反映である。ふたりはハイパークで社会主義者の演説を聞く。それを聞いてジョージは感動する。それに対して、シ ril はむしろ反発をする。社会主義者の言うことを信じると、すべてが泥になってしまう。

マーブルアーチコーナーでは、ぼくたちは、プラタナスの木の下で熱弁をふるっている小柄な社会主義者に耳を傾けた。彼の言葉の灼熱の流れを聞くと、貧乏人の尽きぬ悲惨を知ること、かつて受けた傷跡がまたうずくのである。ぼくはひるんだ。その男にとって、イーストエンド貧民街以外に世界はなかった。そして

イーストエンドが干上がった水たまりで、そこにいる生物は照りつける太陽の下で、泥のなかで、のたうちまわっているのがあった。しまいにロンドン全体が、生命の元素を奪われて黒い泥だらけの、のたくり、もがくもののように見えた。ぼくは、その小男がぼくが以前に見たように、泥だけを見せるのではないかと恐怖を感じた。次に、彼の目はいつも泥で一杯で、決して明るくなることはないのだと、彼にあわれみを感じた。ジョージは彼の言葉に感動して、耳をそばだてて聞き入った。(281-2)

社会主義者に対するシ ril とジョージの反応の相違に注目すべきである。ここではジョージの視点も示されているから、シ ril の視点だけにひきつけられることはないが、作品全体として見れば、読者はシ ril の視点から、対象を見ているわけであり、かなり偏向していることになる。

このあと、ジョージは、シ ril に案内されてテムズ河の岸、エンバンクメントにいるホームレスを見る。ジョージは、シ ril に可哀想だから金をやれという。

「何かやれよ」彼は驚いてささやいた、ぼくは不安になった。それから急にポケットからフロリン銀貨を取り出して緊張して、彼女の手の上にすべり落とした。彼女の手は、柔らかく、あたたかく、だらりとしていた。(282)

同じような内容はロレンスの初期の詩に見ることができる。“Embankment at Night, Before the War: Outcasts”は、雨の夜、チャリングクロス橋の下でうずくまって寝ているホームレスを描いている。暗闇のなかで普通は見えないのだが、近くを列車が通るたびに、その灯火に照らされて、横たわっている姿が浮き出るのである。この描写は、『白くじゃく』の描写と酷似しており、同一体験が詩と小説の一部になったようだ。小説では、上に引用したように金をやる。前述の詩には、ホームレスに金をやる場面はない。

金をやる場面は、ほかの詩にある。ロレンスは1906年9月から2年間、Nottingham University Collegeに学んだが、そのとき使用したノートに書かれた詩の草稿が残っている。未定稿というべきもので、定本詩集には載ってはいないが、内容的には、十分作者の心情は表

現されている。そのなかのひとつ、“Charity”に『白くじゃく』にあるような場面がある。

By the river
In the black wet night as the furtive rain slinks
down,
Dropping and starting from sleep
Alone on a seat
A woman crouches.

I must go back to her

I want to give her
Some money. Her hand slips out of the breast of
her gown
Asleep. My fingers creep
Carefully over the sweet
Thumb-mound, into the palm's deep pouches.

ほぼ同じ内容が、“Brotherhood”という、別の詩稿にも描かれている。同じ内容が別のタイトルを与えられていることには、注意してよいだろう。同じく金をやるにしても、単に困っている人に恵むというのではなく、「仲間意識」があれば、brotherhood だろう。『白くじゃく』の場合、強いて分けると、シ ril は charity の意識があり、ジョージには brotherhood の意識があるといえよう。同じ体験をしても、その体験の質の違いが二人にはある。これがきっかけになってジョージは社会主義者になり、そのグループに入る。

ロンドンのホームレスの問題は、当時かなり大きな社会問題になっていた。ロレンスがロンドン郊外の小学校で教鞭を取るため上京したのは1908年10月であるが、その年の12月26日の『タイムズ』は、“The Legal Poor in London”という見出しで、ロンドンの貧困者について報じている。それによると、1908年は総計で130,543人であり内訳は救貧院に収容されている貧困者が81,506人、屋外の貧困者は49,037人である。ウェストミンスター地区では112人が屋外貧困者である。総計では1898年以来で最高的人数であり、人口1000人に対する割合では、27.2人で、1904年の27.4人について2位である。このような現実をロレンスはロンドンで初めて体験したのであり、それが初めて見てジョージの驚きとなったのである。

レティは、ロンドンのハムステッドの自宅にシ ril とジョージを招待したが、レティとシ ril はドビッシーやシュトラウスの話をしていて、ジョージは話題に入っていけない。シ ril は、新しい芸術に心を奪われ、貧乏人のことには注意がまわらない。そういうシ ril の視点から語られるのが、この小説なのである。

他方、ジョージは、これらの体験がもとになって、社会主義に関心をもつようになる。

彼（ジョージ）がロンドンに行った結果、虐げられた人びとを救う主義に熱狂的に献身することになった。居間の壁にワッツの「マモン」の絵が掛かっていた。またサイドテーブルにはブラッチャーオード、マスタマン、キオザ・マネの著作があった。地区の社会主義者は、改革を議論するために木曜日の晩、「ホリーズ」に集まっていた。(291)

ブラッチャード(1851-1943)、マスタマン(1873-1927)、マネ(1870-1944)は当時の革新派の指導者であった。こういうジョージのモデルには、ロレンスの知人で社会主義者のホプキン(William Edward Hopkin, 1862-1951)がいることは明らかだ。このあと、ジョージは社会主義から離れていき、アルコールに依存する人間になってしまう。ジョージはホプキンのような人物として発展していくことはなく、シ ril の視点で理解できる人物の範囲にとどまることになった。

5

サクストン一家は、農園を追い出されてしまう。もし農園にいたことができたなら、ジョージの運命も違ったものであったろう。彼は牛の世話も好きだったから、もし農園にいたことができたなら、一生、農夫として幸福に暮らすことができたかも知れない。農園から追い出されたために彼の人生行路は狂ってしまったと言える。

サクストン一家が農園を追われたひとつの原因に地主の許可なくして農地内のウサギを撃ったということがあつた。ウサギが作物を荒らすので地主のテンペストに撃つ許可を求めていたのであるが得られなかった。仕方なく無許可でウサギを猟銃で撃った。このような一種に密猟の事件はよくあり、新聞にも報道されている。この裏には、『マンチェスター・ガーディアン』1908年1月16日が伝える the Ground Game Act という法律がある。

その内容は次の通りである。

Under the Ground Game Act the owner of the land, together with the tenant farmer or occupier, had concurrent rights to shoot, kill, and destroy rabbits and hares, and if the shooting rights were leased under seal the owner and tenant had concurrent rights with the lessee.... The object of the Act was to give the tenant the sporting rights which the Legislature thought he was entitled to, and to give him protection against his crops being overrun if the landlord did not exercise to a sufficient degree his shooting rights.

これを読むと、サクストン家は地主のテンベスト家と農地のウサギを撃つことについて共同行使の権利もっていた。地主が撃たない場合は作物を荒らされるのを防ぐため、ウサギを撃つ権利があると述べられてある。問題なのは「共同行使の権利」という文言である。一方が勝手に行使するわけにはいかない。サクストンは、地主に要請したのだが、許可を得られず、ついに単独で作物を荒らすウサギを撃ち、その結果、農園を追われることになり、ジョージは愛着のある農園から離れなければならなかった。借地人が地主よりも弱い立場にいることがわかる。追われたあと気骨のあるサクストン氏は土地の国有化の問題を考えている。しかし、「ネザミア」を離れ、ロンドンで新しい生活を送っているシリルにとって、サクストン一家の離散は、感傷的な気分を起こさせるが現実の問題にはならない。

結 語

この作品には、ふたつの世界がある。ひとつはテンベスト家を中心とした持てる者の世界であり、他はサクストン家や炭鉱労働者、村人たちがつくる、持たざる者の暗い世界である。この作品は持てる者の視点で書かれている。というのはシリル・ピアズオールは持てる者に属しているからである。そのため持たざる者は、影のような存在である。実際は、持たざる者の存在は大きいのであるが、シリルの視点から見られるからそうなるのである。森番アナブルは、たしかに現代文明批判者の面を持ち、それなりに評価しなければならないが、彼はみずか

らは持たざる者でありながら、持てる者の手先の働きもしている。アナブルのもつ二重の役割に注意する必要がある。

この作品の読者は、ややもすれば、持てる者の視点から、この作品世界を見る。本論は、その視点からではなくて、できるだけ、持たざる者の視点からこの作品世界を見ようとする試みである。

謝 辞

The Times と *The Manchester Guardian* の閲覧を許可してくださった一橋大学図書館に感謝する。

註

- (1) *English Studies*, Vol.75, Number 2, March 1994.
 - (2) Edward Nehls: *D.H.Lawrence: A Composite Biography*, 1,103.
 - (3) *The Letters of D.H.Lawrence*, 1,p.44.
 - (4) Keith Sagar: *The Art of D.H.Lawrence*, p. 9
 - (5) John E. Stoll: *The Novels of D.H.Lawrence: A Search for Integration*, p.16.
 - (6) Graham Holderness: *D.H.Lawrence: History, Ideology and Fiction*, p.115
 - (7) Peter Scheckner: *Class, Politics, and the Individual*.
 - (8) Robert E. Gajdusek: "A Reading of "A Poem of Friendship," A Chapter in Lawrence's *The White Peacock*," in *The D.H.Lawrence Review*, Vol.3, No.1.
 - (9) Evelyn J. Hinz: "Juno and *The White Peacock*: Lawrence's Epic" in *The D.H.Lawrence Review*, Vol.3, No.2.
 - (10) 『白くじゃく』からの引用は、*The White Peacock* (Cambridge University Press) の頁数を示す。
 - (11) *The White Peacock*, p.376 参照。『マンチェスター・ガーディアン』の1910年6月13日の記事には、"Clifton Colliery Dispute"という見出しで、前年の1909年10月から続いたノッティンガム州の炭鉱ストライキが8月ぶりに終わったことを述べ、さらに、パーバーウオーカー会社の労使紛争に触れて次のように伝えている。
- At the extensive Eastwood pits in Nottingham of Messrs. Barber and Walker 1,500 men have

received notices which expire next Wednesday, and a similar number of other men have intimated their intention of striking owing to grievances regarding wages of stallmen under the operation of the amended price lists.

(12) Stoll: *The Novels of D.H.Lawrence*, p.29.

(13) Worthen: *D.H.Lawrence and the Idea of the Novel*, p.11.

主要文献

James C. Cowan (ed.) : *The D.H. Lawrence Review*, Vol.3, Nos.1 and 2. University of Arkansas, 1970.

David Ellis and Ornella De Zordo (eds) : *D.H. Lawrence: Critical Assessments*, Vol.I. Helm Information, 1992.

Graham Holderness : *D.H.Lawrence History, Ideology and Fiction*. Gill and Macmillan, 1982.

D.H.Lawrence : *The White Peacock*. Cambridge University Press, 1982.

—*The Letters of D.H.Lawrence*, Vol.I. Cambridge University Press, 1978.

Edward Nehls : *D. H. Lawrence : A Composite Biography*. The University of Wisconsin Press, 1957.

Henry Pelling: *A Short History of Labour Party*. Macmillan, 1982.

Peter Scheckner: *Class, Politics, and the Individual: A Study of the Major Works of D.H. Lawrence*. Associated University Press, 1985.

Keith Sagar: *The Art of D.H.Lawrence*. Cambridge University Press, 1966.

John Stoll: *The Novels of D.H.Lawrence: A Search for Integration*. University of Missouri Press, Columbia, 1971.

Joh Worthen: *D.H.Lawrence and the Idea of the Novel*. Macmillan, 1979.

Yudhishtar: *Conflicts in the Novels of D.H. Lawrence*. Oliver Boyd, 1969.

summary

D.H.Lawrence and the Labour Movement:
With Special Reference to *The White Peacock*.

In *The White Peacock* Lawrence fails to express his ideas of life fully, but it is clear that there are important themes in an inchoate state. It is quite natural that readers of the novel see the world with Cyril, the narrator's eyes, but if they do so, they cannot fully understand the novel. Cyril's view is limited because of his middleclass background. In this essay an attempt is made to throw light on the life hidden from Cyril's angle.